

図書館旧館改修工事の進捗



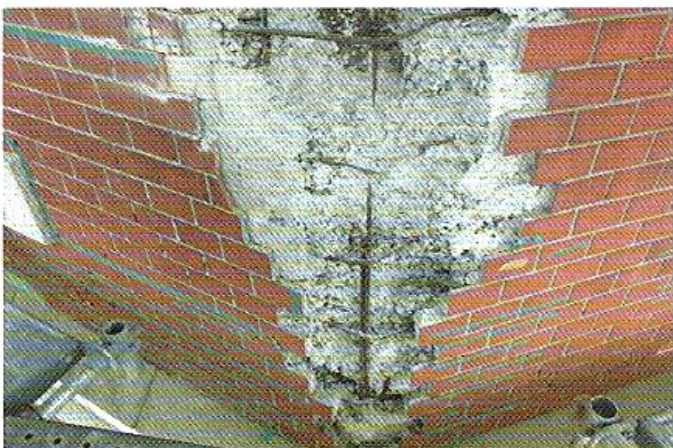
図書館旧館の改修工事は開始から約二年が経過し、工事の終盤に差し掛かっている(本文一四ページ参照)。建物の地下では免震レトロフィット工事、地上では保存修理工事を実施している。本工事は順調に推移しており、本年五月末まで行う予定で、いよいよラストスパートである。



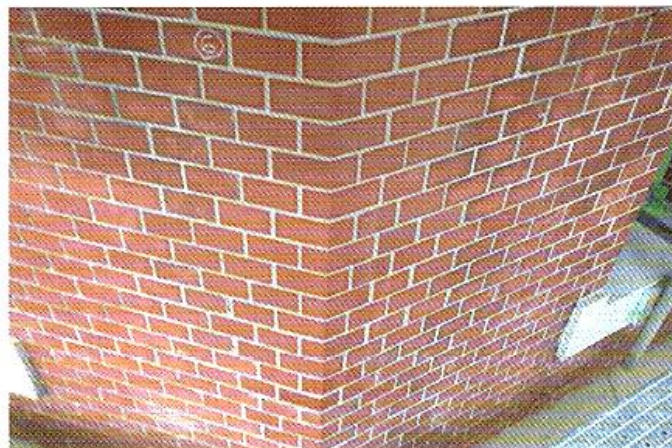
屋根板金補修



屋根スレート補修



外壁補修前



外壁補修後

図書館旧館改修工事の進捗 その三

わたなべこうじ
渡辺浩史

(慶應義塾管財部工務担当主任)

二〇一七年二月より図書館旧館改修工事が始まり、約二年が経過した。本工事は二〇一九年五月末まで行う予定で、二〇一八年十二月現在、全体工事の九〇%が完了し、工事の終盤に差し掛かっている。本工事においては最初の一年は、耐震工事のため、地下作業を主体としていたが、その後の一年は上部の保存修理も実施しているため、今回は主に、保存修理工事について報告したい。

二〇一七年末に仮設足場を設置し、改めて近くで建物に触れながら調査を実施した。それまでの調査を踏まえ、設計段階である程度、補修範囲・内容を想定していたが、近くで見ると、想定していた以上に建物の状態が悪いことが判明した。一見きれいに見える外装であっても打診し、空音が鳴る箇所を剥がしてみると、内部のコンクリートはポロポロで鉄筋が錆びており、外装の石も、軽く叩いただけで、ポロツと破片が落ちてしまうような箇所が散見される状態であった。

調査により、当初想定していたより広範囲な補修が必要となることが分かり、それぞれの箇所に対して補修方針を立て、実施している。

外壁（レンガタイル）

図書館旧館は明治四十五年に竣工し、その当時は全てレンガを積み上げて造られた組石造であった。しかし、大正十二年関東大震災で過半の部分が倒壊し、造り替えられており、新たに造られた箇所は、鉄骨鉄筋コンクリート造のレンガタイル貼りである。今回、外装全面に渡り調査し、状態を確認した。構造体の大部分は造り直されているが、第一書庫の裏側に明治期のレンガ積み状態が残って

おり、そこだけはイギリス積みとなっていた。今回補修する箇所は、主にレンガタイル貼りの箇所で、タイル張り替えとピンによる固定で補修する。当初タイル七八〇枚、ピン二六、〇〇〇本を想定したが、下地の状態があまりに悪かったため、タイル五、四五〇枚、ピン一一、〇〇〇本に変更した。レンガタイルは、当時の質感・色を再現したものを使用している。

外装（石・擬石）

外壁に使われている石は、花崗岩・テラコッタ・擬石の三種類が使われている。花崗岩は熱に弱いいため、震災による被害で、欠損している箇所が多い。それらは、戦後に擬石で補修をされているが、経年により、それらの浮き・欠損箇所が多数あった。全ての欠損箇所を補修することは難しいため、各部分の状態により、①取り除いて擬石で補修、②ピンを刺し固定、③除去または現状のまま、と段階に分けて選別し、補修作業を行った。

外装は全体的に高圧洗浄で汚れを落とし、特に汚れの酷いところは数種類の薬品で磨いている。

窓サッシ

図書館旧館の大会議室には、高さ5mの大窓が一一カ所ある。鉄製のサッシで、サッシの下部は錆びて穴が開くなどポロポロであったため、サッシ一枚全て取り外し、一旦工場にもっていき、研磨、塗装、腐食している箇所は、一部切り取り新たな部材を溶接し補修している。

昔のサッシはガラスの取り付けに、パテを使っていることから、固着していて、ガラスを外すのが難しく一苦勞である。ガラスは極力再利用するため、丁寧に外さなければならぬ。鯨の油をつけてパテを溶かしたり、削りだしたりして慎重に外していった。不足したガラスは、東京駅前の解体された新丸ビルで使用していたガラスを、三菱地所より提供を受けて使用させてもらった。戦後の工場製法によるものだが、明治期のガラスのようなひずみがあり、今では貴重なものだ。

屋根（スレート）

図書館旧館の屋根は、東京大空襲で焼失し、戦後一旦作りかえられている。その後、昭和五十七年の大改修の折、全て

石（スレート）に葺き替えられ、現在の姿となっている。

今回、部分的に欠損、割れがあった箇所の張り替えを行った。石はカナダ産で、一枚三〇センチ×一八センチ、一枚一枚、釘と針金で貼り付けていく。全体で、四、七三五枚張り替えを行った。

屋根（板金）

屋根には、銅板も多用されている。板金工事と呼ばれるもので、厚さ〇・四ミリ・長さ三五センチの板状の銅を現場で加工しながら貼り付けていく。屋根の棟部や、主だったところの銅板は全て張り替え、ドーマー窓の周辺など状態の悪いところは、部分的に張り替えた。銅板を貼ったばかりでは、ピカピカと光沢があるが、一週間ほどでくすんできて、その後、緑青（緑色の錆）色になるには一〇年ほど時間がかかる。

現在の建築では、屋根に石や銅板を使うことはほとんど行われていない。建築の技術は進歩しているが、当時できていたことが、現在では難しくなっており、いま、これらの補修ができる職人も希少であり、高齢化も目立つ。

内装

今回、内装は極力補修をかけないこととしている。しかし、玄関ホール、階段室の最もメインとなる壁・天井は漆喰塗りとなっているが、経年により、浮き・割れがあり、その箇所については、部分的に塗り替えることとしている。

文化財の保存修理は、調査し、状態を確認し、材料や工法を見極めたうえで、修理を実施する。新築に比べ、手間と根気がいる作業である。造り直したほうが簡単な場面も多いのだが、例えば、壁が汚れ、色が褪せているから、塗り直そうとしても、その汚れは、何十年と風雨にさらされてきた色やムラであり、似た色で塗り直しても、安っぽい雰囲気になってしまう。色ひとつでも、そこに重ねた歴史があり、簡単には表現できないものである。

このような保存は、修理することと同じに、全てをきれいにするのではなく、いかに元の雰囲気壊さないようにするか配慮して行うことも重要である。